

対談「都市におけるコミュニティ、劇場の役割」
建築家 山本理顕×長塚圭史

「南条嘉毅の因数分解」
美術作家 南条嘉毅×長塚圭史

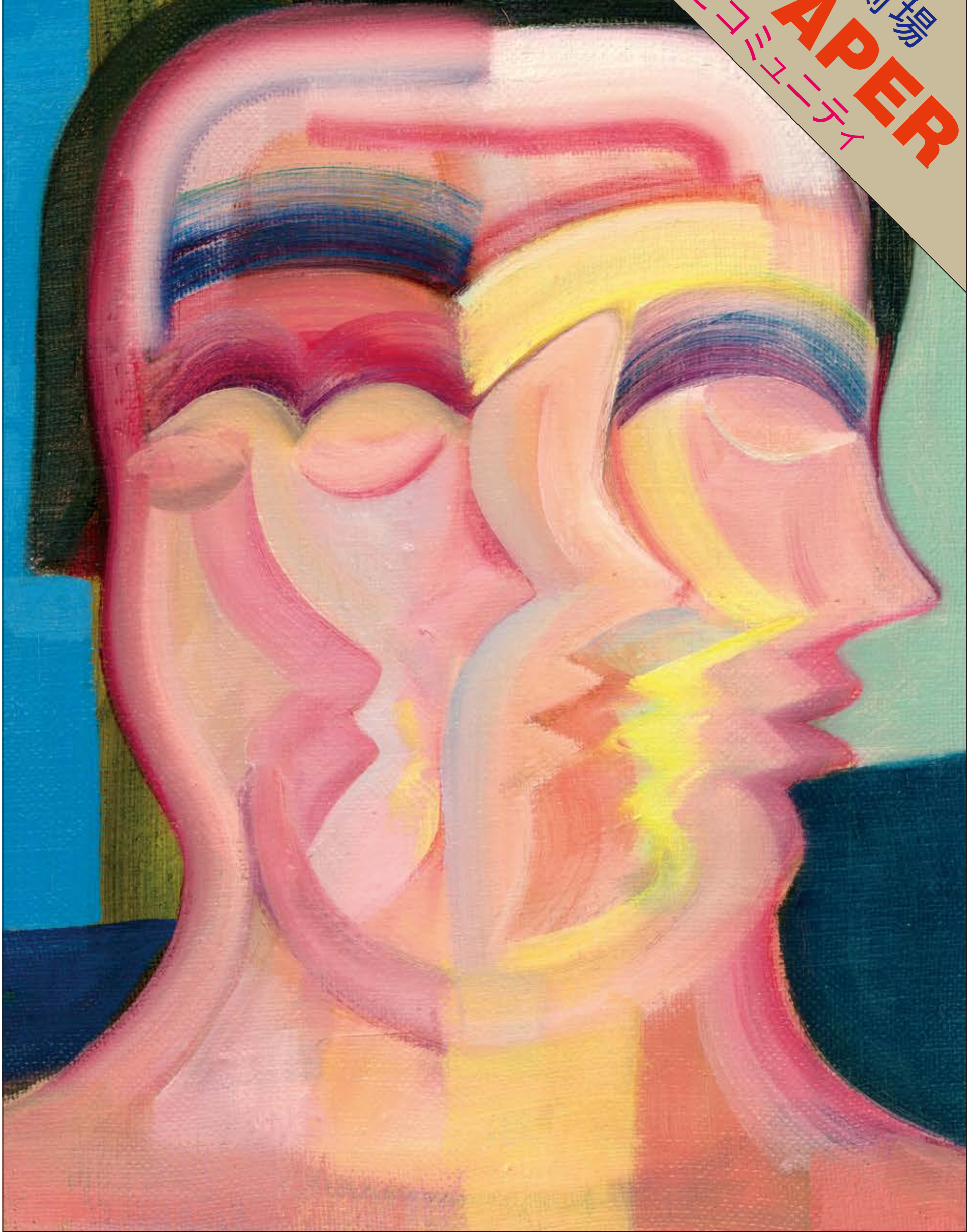
〈寄稿文〉アートディレクター 北川フラム

〈REVIEW〉クリス智子、徳永京子、延江浩、大島広子、坂本美雨

〈神奈川へ、会いに〉山野真悟(特定非営利活動法人黄金町エリアマネジメントセンター)

ただいま、KAAT準備中／KAATな人の行きつけ／公演スケジュール

秋
Beyond Theatre
季刊誌
神奈川芸術劇場
KAAT PAPER
特集 劇場とコミュニティ



山本理顕 × 長塚圭史

「都市におけるコミュニティ、劇場の役割」

「ひらかれた劇場」を掲げるKAAT神奈川芸術劇場。そのコンセプトにぴったりのゲストを対談にお迎えすることができました。国内外のパブリックスペースや住宅を数多く手がけ、世界の優れた建築家に贈られるプリツカー賞を受賞した山本理顕さんの建築は、地域や人にひらかれたコミュニティ創出の一翼を担っています。近年の代表作の一つでもある、横浜市立子安小学校をご案内いただくところから対話は始まりました。

文=尾上そら 写真=山本康平 取材協力=株式会社山本理顕設計工場、横浜市立子安小学校

横浜市立子安小学校にて



規格化、標準化に抗う建築のあり方

長塚 最初に、2024年のプリツカー賞受賞おめでとうございます。「建築界のノーベル賞」といわれる、荣誉ある賞と伺いました。このようなタイミングでKAAT PAPERにお招きできたことがとてもうれしいです。近年の代表作の一つ、ここ横浜市立子安小学校を山本さんご自身にご案内いただき見学させていただきましたが、解放感のある吹き抜けになっている階段や複数の教室をまたぐベランダ、向き合う教室に挟まれた幅4メートルもある広い廊下、教室のなかを見えるようにした壁や扉など、僕がもっている学校校舎のイメージを覆す設えばかりで驚きました。建築設計として、高く評価されているのはどんなところなのでしょうか？

山本 長塚さんもお気づきになったように、教室と教室の間や校舎の内と外など、できるだけ隔たりをなくし、外へひらこうとした構造をプリツカー賞の審査員も評価してくださったのだと思います。小学校は1年生から6年生まで、年齢も体格も大きく違う子どもたちが過ごす場所です。それを一律に管理しようとしても無理だと思うんです。机や椅子などもサイズが多少違うだけで

全部同じ製品を使わなくてはならない。規格化、標準化は日本の教育シーンの主流ですが、私は危惧しています。

長塚 確かに、今どきの小学6年生はかなり大きな子もいます。野球の大谷翔平選手のような体格の若い世代も増えているんですから。

山本 おっしゃるとおり。特に高学年は自分たちのことを自分で、ちゃんと考えられるだけ発達しています。逆に1年生には自分の机など

不要で、「他者と集団生活をする」のがどういうことを学ぶことができればいい。机や椅子より、皆と一緒に勉強したり遊んだりできる空間のほうがいいと思います。

長塚 演劇の稽古場にも言えることです。環境をどうつくるかで、空気がまったく違って来る。特に稽古初日にスタッフ、キャストだけでなく事務所のマネージャーさんなど関係者の多い時に、口の字型に机を並べて上座の真ん中に演出家が座り、それを取り巻くように関係者席があるという状態は、どうしても緊張感が生まれてしまいます。

山本 役者さんでも緊張するんですか。

長塚 四角い囲みの席は緊張してしまいますね。それが、テーブルを取り払って車座に丸く囲むように座るだけで「一つの作品を一緒につくる仲間だ」という一体感に変わるんです。

山本 なるほど、現場のことは現場の方が一番よく知っている。学校も、子どもたちのことを一番よく知っているのは現場の先生方。だから文科省が一律に決めるのではなく、それぞれの地域、それぞれの学校の先生に、もっと教育の核となる部分を任せようなかたちにできれば、と思うんです。職人仕事や第一次産業、二次産業の現場で、仕事の技術を教えることにも通じる場所があります。教育も、その地域の風土や特色によって教えることが変わって然るべき。学校のある地域で育った人が教員になり、後進である地元の子どものための教育を手がけたら理想的です。例えば、子安は漁師町という歴史もあるんです。

長塚 体育館に大漁旗が飾ってありましたね。

山本 家の仕事が漁業で、それを継ぐと決めている

子どもならば、早くから漁に出て経験を積むという選択もあるはず。画一的に、「とにかく大学を出て」というような発想は、むしろ子どもの可能性を狭めてしまいかねません。

建物やまちのつくりが人の振る舞いを変える

長塚 山本さんは建築設計を手がけられる時、立地というより、地域や土地について深く観察や考察をし、建物の構造や機能に活かしていってほしいですね。

山本 先ほどの教育と同じ考え方で、同じ学校校舎でも土地や地域によって求められる役割が違うのは当然です。そのことを一番よく知っているのは大きな行政区を管理する役所ではなく、町内会のような小さな自治会だと私は思います。学校だけでなく公園や運動場のような、本来は誰もが自由に出入りできた場所が、近年は安全性の問題から、届け出た行事での利用以外はクローズドになっていることもあります。でも、その場所が生活圏内にある自治会や町内会で管理すれば、今よりも使用の自由度は上がり、柔軟に使えるようになるはずですよ。アメリカの社会学者クラレンス・アーサー・ペリーは「小学校区」ということを提唱しています。それは「公立小学校を近隣住区、周辺1ヘクタールあたり1万人程度の人口の中心とする」という考え方です。日本のまちづくりも、その考え方を基にしていたのですが、人口増減のばらつきや地域差が激しく、小学校の位置が中心でなくなってしまった。

長塚 そうだったんですか。

山本 地縁のない住民の流入が多いところには高層マンションが次々に建つけれど、バラバラの人が集まるタワマンでは、コミュニティは成立しにくい。そういう地域では、役所の管理が厳しくなるのは仕方ない、という方向に流れてしまいます。

長塚 それで学校や公園を高い塀で囲むようなことが増えてしまうんですね。劇場でいうとステージドア、楽屋口の管理に似たことがいえるかもしれません。著名な俳優さんが出入りすることもあるので、普段から厳重に出入りが管理されているんです。でも、「守られる」のではなくある程度までは自己管理するという意識でいることで、俳優自身も地域の人との間に敷居をつくらずに済むし、自然体で振る舞う俳優に対してなら、街の人たちも良識のある距離感で振る舞ってくださるんじゃないかと僕は思うんです。

山本 同感ですね。





長塚 劇場は、施設が立地する地域の一部。地域や人との共存方法を探るのも僕らの仕事の一部じゃないかと思っています。

山本 「面識がなくてもすれ違えば挨拶をする」といった、生活上のルールや常識が薄れているのでしょうか。私たちが若い頃などは、もし有名な俳優が目の前にいたとしても、おそれ多くて近寄れなかった。歌舞伎や映画俳優など、近寄り難い存在でした。

長塚 そういうことはありますよね。欧米では劇場併設のバーやパブ、近隣の飲食店で終演後に出演者が飲んでいことも普通のことです。観客と普通に作品の話をしたりしている。そういう社会では、ファンが俳優を囲んでもみくちゃにするようなことは起こらないはずですよ。

山本 昔、パリに初めて行った時、フランスを代表する俳優のジャン・ポール・ベルモンドが街中を歩いていたんです。パリの人たちは軽く挨拶したり声をかけたりはするけれど、群がったりは決してしなかった。パリジャン、パリジェンヌとして恥ずかしい振る舞いはしない、という意識があるのでしょうか。

長塚 パリの街が、人にふさわしい振る舞いを促すんですね。

山本 建築でも同じことができますと私は考えているんです。「パリのカフェに座っている人は、皆格好よく見える」というように、その場にふさわしい装いや振る舞いを促す機能が建物や施設、デザインされた街区にはある。それこそ、劇場や文化施設のもつ機能とも重なるところがあると思います。パリも、もともとは街路が狭かったんですが、セーヌ県知事だった

ジョルジュ・オスマンが19世紀半ば、皇帝ナポレオン三世の命で下水整備とパリ市街の大改造を行い今の都市原型をつくった。結果、今のような街になった。住宅の下には飲食店が併設され、人の行き交いも経済循環も途絶えることのないまちづくりが功を奏したわけです。でも、近年の日本は宅地と商業区を分かち構造になっているので、どの地域も構造が似てしまうし、時間によって人通りが絶えてしまったり、商業区までの行き来に不自由が出るなどしている。

長塚 反面、駅前や国道沿いなど、全国に同じショッピングモール、同じチェーン店がずらりと並んでいる。あの光景を目にすると居心地が悪くなるんですよ。一つ裏通りに入った、昔ながらの飲み屋街に入ると途端にホッとします。

「ひらかれた建築」が担う大切な使命

長塚 地域に住む人のためになるづくり方もあるんですよね？

山本 理想を言えば、繁華街もいわゆるチェーン店やグローバルなブランドショップなどを安易に入れず、地域ごとの町内会・自治会で必要な商業店舗を吟味して招致することが大事だと思います。どんなまちづくりでも、町内会単

位での取り組みがベストですし、町内会自治は国からも認められている。ただ、新興のマンションに移住してきた人の多くは、町内会など地域との関わりが薄く、その代わりに、治安維持としてあちこちに監視カメラが設置されるわけです。

長塚 歴史のある商店街があるところは、そういう負の循環を免れている気がします。劇場の近くにある中華街はいい例ではないでしょうか。横浜だと元町も、昔からの長いつき合い、人間関係がちゃんと機能している印象です。

山本 元町は商店会の方たち自らセットバック（土地の境界線から一定の感覚を保ち、建物を建てること）して、歩行者に快適な空間をつくったんですよね。

長塚 過去のKAAT PAPERで、野毛大道芸の実行委員長・田井昌伸さんにご登場いただいたことがあるんですが、野毛も自治の矜持が感じられる街ですよ。山本さんは今、野毛のジャズ喫茶再建に携わられているとか。

山本 2023年に創業90周年になる「ジャズ喫茶ちぐさ・吉田衛記念館」を、「ジャズミュージアムちぐさ」としてリニューアルするプロジェクトです。野毛で居酒屋・村田家を営む藤澤智晴さんが代表理事を務め、23年5月に着工しました。ジャズ喫茶は地下に入れ、上はオープンスペースにしてたくさんの方が自由に入出入りできる空間にする予定です。将来的には演劇も上演できるスペースになるかもしれません。

長塚 すごく興味があります。

山本 ご案内しますよ。

長塚 劇場から街へと出ていく機会は、僕としても大歓迎です。それに、あの大道芸の盛り上がりと一体感をよく知る街の方たちと、その地元で一緒にすることは横浜にある劇場として願ってほしいこと。もちろん、一番大切なのは劇場のある街と人との認知され、愛していただくことですが。

山本 そのきっかけを一緒に探したり、提供してくれるのが昔ながらの商店街ですね、きっと。

長塚 そういったこともあって、KAAT PAPERを含め、僕自身が地域の方々を訪ねる機会をコツコツ重ねている最中です。

山本 建築や“まち”は、特定の用途のために存在するだけでなく、そこに住んだり関わったりする人に役割・役割を与えることも機能の一つだと考えています。そういった機能についてよく考えてつくられた建築や“まち”は、そこに属した個々人に心地よく役者のような“フリ”をさせてくれる。先ほどのパリの事例はまさにそうで、そういう役割を得た人はより楽しく安心して暮らせると思うんです。たった一人の、何者でもない個人のための建築という

ものは存在しません。戦後、窓も扉も閉ざし、縁側のような境界域もない核家族のための小さな家や集合住宅が席卷した時、人々は最初はそれを安全で快適と考えた。けれど少子高齢化が進んだ今、人々はその小さな空間に閉じ込められて出られなくなっているような気がするんです。そんな閉塞感を解消するためにも、「ひらかれた建築」、「フリ」を与えられる建築をこれからも考えていきたい。それはKAATのコンセプトにもつながるのではないのでしょうか。

長塚 おっしゃるとおりです。野毛の「ジャズ喫茶ちぐさ」もですが、山本さんの建築と舞台芸術のコラボレーションの機会を探れたら面白そうですね。

山本理顕 Riken Yamamoto

1945年中華人民共和国・北京生まれ。戦後は横浜に移る。日本大学理工学部建築学科卒業、東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了。東京大学生産技術研究所原研究室を経て、1973年山本理顕設計工場を設立。代表作に「埼玉県立大学」「公立はこだて未来大学」「横須賀美術館」「横浜市立子安小学校」など。チューリッヒ空港の複合商業施設「THE CIRCLE」や、天津、北京、ソウル、台北など海外でも複合施設や公共建築、集合住宅を手がける。日本建築学会賞など受賞多数。2024年プリツカー賞受賞。文化庁長官表彰(国際芸術部門)。



南条嘉毅の因数分解

文=大芦実徳 写真=石渡朋 切り絵=ひだかもと



南条嘉毅 × 長塚圭史

美術作家

KAAT神奈川芸術劇場 芸術監督

「風景の絵画から インスタレーションの世界へ」

長塚 南条さんは今、インスタレーションを中心に発表されていますが、もとは絵画からスタートしていらっしゃいますよね。

南条 そうですね。大学では絵画を専攻していました。風景をテーマに制作をしていたのですが、絵の調査のために土地の写真を撮ったり、土や水や音を持ち帰ったり、情報収集などを行っているうちに、インスタレーションでの表現も楽しくなっていったんです。

長塚 当時から各地に赴いていらしたんですか？

南条 まずは一番身近なところからと、自宅のまわりから歩きはじめました。その頃、東京都と神奈川県に住んでいたため、江戸五街道の甲州街道を、日本橋から長野県の諏訪まで歩いてみようかと。

長塚 ずいぶんな距離を歩きましたね！ そのあとに「水と土の芸術祭」(2012年、2015年、2018年)、「大地の芸術祭」(2012年)などに参加されているわけですよね。

南条 ええ。芸術祭に参加することで、自主的にやっていた時とは違い、地域の人とよりつながりやすくなりました。地元住民の方やその地域に詳しい人との交流は、作品をつくっていくうえでとても大事ですね。資料で追っていても、細かい部分まではわからないことも多く、人の記憶が頼りだったりするので。

長塚 調査はどのように始まることが多いですか？

南条 最初は町の図書館に行きます。図書館にはその地域の資料が必ず置いてあるので、片端から読んでいって、見つけた事柄について掘り下げていくという感じです。

KAAT EXHIBITION 2024 「南条嘉毅展 | 地中の渦」

9月23日(月・休) - 10月20日(日) ※火曜休業

11:00 ~ 18:00(入場は17:30まで)

KAAT 神奈川芸術劇場 <中スタジオ>

太古から現代にいたる横浜の自然と人間の記憶と記録。時間と空間の積層に宿る膨大な世界の軌跡を現代に呼び覚ます。美術作家 南条嘉毅によるインスタレーション。

入場料(コンセプトブック付)

一般1,000円/神奈川県民割引(在住・在勤)900円/学生・65歳以上500円/高校生以下・障がい者手帳をお持ちの方と同伴者1名無料
※同時開催の『リア王の悲劇』『まだここ通ってない』公演のチケット提示で無料でご鑑賞いただけます。(ご本人様1回限り、会期中いつでも入場可能)

チケット取扱い

劇場内3階中スタジオ受付(会期中のみ)



関連イベント

リーディング 「地中の渦 | ある案内係についての覚え書き」

9月28日(土) 13:30頃より開始 会場:KAAT神奈川芸術劇場<中スタジオ>

出演:長塚圭史 物語:南条嘉毅 テキスト作成:大崎清夏
観覧券チケットで観覧無料・予約不要

アーティストトーク 「地中の渦 | 山下居留地遺跡にもぐる」

9月29日(日) 14:00-16:00 会場:KAAT神奈川芸術劇場<アトリウム>

トーク:南条嘉毅 ゲスト:天野賢一(かながわ考古学財団特別研究員)

参加無料・申込先着順30名(当日空きがあれば参加可)

申込方法:9月1日より下記の申込フォームよりお申し込みください。

<https://krs.bz/kanagawaaf/m?f=1935>

キュレータートーク

10月5日(土)・19日(土) 14:00-14:30 会場:KAAT神奈川芸術劇場<中スタジオ>

トーク:中野仁詞(キュレーター)

観覧券チケットで観覧無料・予約不要



「スズ・シアター・ミュージアム」 という共通点

—南条さんと長塚さんは、「スズ・シアター・ミュージアム(石川県珠洲市)」という共通点があります。

長塚 2022年に「スズ・シアター・ミュージアム」で「さいはての朗読劇」、翌2023年は「さいはての朗読劇」第2弾の演出を行いました。南条さんはスズ・シアター・ミュージアムのキュレーションと演出を担当されていましたが、「珠洲の大蔵ざらえプロジェクト」はかなり大きな規模でしたよね。

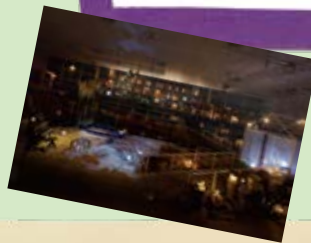
南条 そうですね。多くの住民の方にご協力いただき、約1,700組の民具を収集させていただきました。展示物の調査や資料制作など、国立歴史民俗博物館の研究者の方々と一緒に活動しました。

長塚 「大蔵ざらえ」は珍しい言葉ですね。どんなコンセプトだったのですか？

南条 総合ディレクターの北川フラムさんによって発足されたプロジェクトで、最初聞いた時はなんだろう？ と思いました。珠洲市は高齢化率が50%を超え、どんどん過疎化が進んでいて。空き家や家じまいをされる家々の蔵や納屋には、代々引き継がれてきた民具や地域の財産が眠っているのではないかと。また、珠洲市には「珠洲焼資料館」という施設はあるのですが、博物館がない。この「大蔵ざらえ」で収集された民具を活かすことで、美術館と博物館の融合したような、新たな劇場型の博物館ができないか、ということがこのプロジェクト発足のきっかけです。

長塚 珠洲市は元旦の能登半島地震で大きな被害を受けた地域の一つです。倒壊してしまった家や蔵にもまだいろいろと残されているでしょうからね。

南条 地震以来、何度か足を運んでいます。現場はまだまだ大変な状況です。半壊した家を壊すのにも、まずは荷物を外に出さなくてはいけないので、お手伝いやプロジェクトなど、今後もこの地域に深く関わって、活動していければと思います。



ぜひ横浜の
歩いてもらいた





アートディレクター
北川フラムが

南条嘉毅を語る

「南条嘉毅」を知る人物として、2021年に開催された「奥能登国際芸術祭 2020+」総合ディレクターを務めた北川フラムさんによる寄稿文をお届けします。



「KAAT EXHIBITION 2024」で 見つける、「某」とは

長塚 KAATの2024年度メインシーズンのタイトルを「某」としました。現代社会は匿名性が高いと日々感じています。AIはいろんな人の経験や知識が合わさった一人の人格のようなもの。誰だかわからない人＝「某」というところから発想が始まりました。この言葉を突き詰めて考えていくと、結構面白い。同じ某でも、全体で見ると職業や収入などでカテゴライズされていくけれど、フォーカスして見ると一人ひとりちゃんと今を生きている人間なわけで。「某」と銘打つことで、過去から現在まであらゆる時代に生きていた人を想像できたら面白いと思ったんですよ。

南条 「KAAT EXHIBITION 2024」の作品をつくるにあたり、横浜の歴史について調べている時に、ちょうど長塚さんから今回のシーズンタイトルについて聞いて、自分のなかでパズルがピタッとハマるような感覚がありました。

長塚 「KAAT EXHIBITION 2024」のタイトルは「地中の渦」です。どんな作品ですか？

南条 KAATがある山下町と馬車道通りや弁天通り周辺が舞台の美術作品です。一万年前からここで暮らしてきた人たちの営みを、一人の「某」として追体験できるようなインスタレーションにしました。

長塚 制作の過程についても教えてください。なぜこの場所を舞台に選んだのですか？

南条 KAATの建物の東側には、明治に外国人居留地であった歴史の展示「山下居留地遺跡ブロード」があります。まずはこの「山下居留地」に興味をもちました。図書館でさらに調べていくと、周辺の地層について面白いことがわかったんです。開港以前の地層に弥生時代や縄文時代に人々が暮らしていた形跡があったんですね。

長塚 横浜は埋立地なので、海の下だと思っていました。人が暮らしていたということは陸地だったんですか。

南条 現在の横浜市の中心のほとんどは海の下だったんですが、この辺のエリアだけ長い尻尾のようなかたちをした砂の陸地だったんです。元町貝塚というのがここからすぐの山手のアメリカ山公園というところに残っています。

長塚 ちょっと驚きですね。そのリサーチの最中に僕と「某」の話をしたと。

南条 そうです。「某」のコンセプトを聞いて、一万年ずっと生きていく人間が一人いたとしたら、その一人の人間がどんな風景を見ていたか、一度物語に起こしてみようと思いついて。そこで長塚さんを仮の主人公にしてストーリーを書いてみたんです(笑)。それから詩人の大崎清夏さんにあらためて物語を紡いでもらって、それをベースにインスタレーションをつくりました。

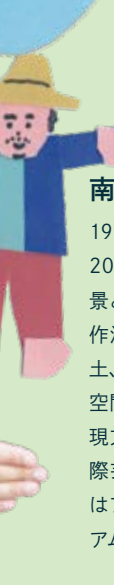
長塚 僕が主人公!? 知らなかったなあ。最後はどうなるんですか。

南条 どうなっていくかは、ぜひ実際に体験してもらえたらと。横浜の地下に潜り、私たち人間の営みに思いを馳せてみてください。



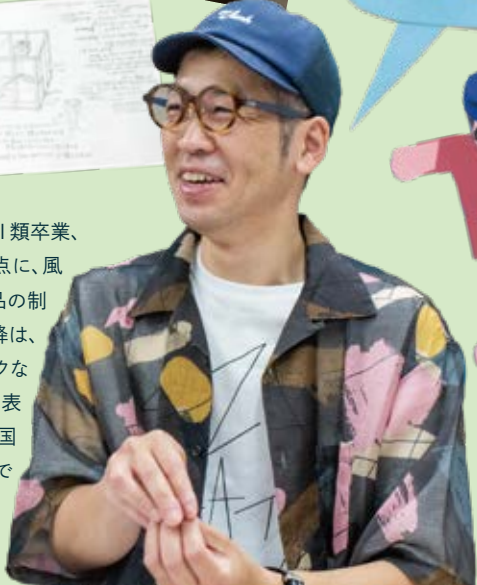
街を散策した時の思ひぬ
出会いが作品に
つながることもあるんです。

街を
いごすね。



南条嘉毅 Yoshitaka Nanjo

1977年香川県生まれ。2001年東京造形大学造形学部美術I類卒業、2002年に同大学研究科(絵画)を修了。東京、和歌山を拠点に、風景とその場所性をテーマとしたインスタレーションや絵画作品の制作活動を各地で展開する。2017年の奥能登国際芸術祭以降は、土、砂を主要な材料としながらも、音と光を加えノスタルジックな空間を通じた劇場型のインスタレーション作品として新たな表現方法を確立。いちばらアート×ミックス(2017年)、瀬戸内国際芸術祭での制作機会も重ね、奥能登国際芸術祭2020+ではアーティストとしてだけでなく「スズ・シアター・ミュージアム 光の方舟」のキュレーションと演出も担った。



南条さんを知ったのは、2012年の新潟県の豪雪で有名な中山間地越後妻有での大地の芸術祭で十日町市北部の下条集落で使われなくなった小学校での展示でだった。教室のガラス窓に土で絵が描かれている。それはその窓から見られる林や山や集落の風景だった。その小学校では三万年間の土の蓄積である3mの土の断面を剥ぎとった列島いたるところのモノリスや、土を使って壁をつくったりと、私たちの立つ大地の土への敬意と可能性を多面的に取り扱う企画のなかで絵画材料でもある土に焦点をあてたものとして南条さんが選ばれたのだった。そのあとも縁が続き、2017年に石川県珠洲市で行われた最涯の芸術祭「奥能登国際芸術祭」で市の中心部にあって往時は街の華でもあった飯田スメル館という残されていた映画館を使っのインスタレーションを氏が手がけた。館に遺されていた映画機材、観客席、看板、扇風機などがそれぞれ場を得て、音と光のなかで存在を顕かにし、時空間が見事におだやかに流れていた。

奥能登は三方海に囲まれた岬で、古くから遣唐使、渤海使が漂着したり、北前船の寄港地であったりして、この列島が海を通して世界とつながり国中を移動している時は殷賑を極めていたが、近代は列島内部の中央集権が加速し、人口も盛時の三分の一、本州で人口最少の市になってしまっていた。その外浦の眼下にはわずかな家屋が道に沿ってあるだけの崖になっている高台の、それ故にはるか日本海を通して地域がまるく感ずる場所にあった体育館を珠洲のシンボルにしようという計画がおきてきた。戦後70年を経た家替わりの時期でもあり、珠洲市民総出の各家の「大蔵ざらえ」が行われた。佐倉にある国立歴史民俗博物館の研究者たちが加わっての丁寧な調査、収蔵が行われたのだが、ここでのコンセプトは「モノをして語らしめよ」である。このシアターミュージアムは人気を博し、長塚圭史さん、阿部海太郎さんや大崎清夏さん、北村有起哉さん、常盤貴子さんが参加した朗読劇の上演や、田中浜さんの踊りも行われ、この生きた博物館、劇場をつくっていく画期的なプロジェクトの中心にいたのが、南条嘉毅さんで、その労苦を惜しまぬ熱意と才能に、私は信頼をもち続けている。

その南条さんが、実はよく知らない横浜をどのように見せてくれるか、この10年BankART1929という日本最良の美術グループが関わってきた現代横浜の時間と現代をどう扱うか、それが美術というゆたかな世界をより広げ、深掘りしてくれるのか、今から楽しみにしている。

北川フラム Fram Kitagawa

1946年新潟県出身。東京藝術大学美術学部卒業。アートフロントギャラリー代表。アートによる地域づくりの実践として「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」(2000～)「瀬戸内国際芸術祭」(2010～)等で総合ディレクターをつとめる。フランス、ポーランド、オーストラリアから勲章を受勲。2018年度文化功労者。

REVIEW



KAATカナガワ・ツアー・プロジェクト 第二弾

『箱根山の美女と野獣』『三浦半島の人魚姫』

2024年2月3日(土) - 2月12日(月・休)
KAAT神奈川芸術劇場〈中スタジオ〉

名作の生まれ変わりは、破天荒!

文=クリス智子(ラジオパーソナリティ)

劇場が神奈川の街に出ていくKAATカナガワ・ツアー・プロジェクト、神奈川を舞台に話が展開していく長塚圭史さん書き下ろしの物語は、神奈川育ち、現在も県民の一人としては、いつにも増して楽しみなこと。神奈川を代表する地名と誰もが知る名作の合体.....どうなるのか?

長塚さんには、たびたび私のラジオ番組にお越しいただき、舞台裏を伺わせていただくのだが、この2作品については、箱根山に登っては野獣が出そうなどころはないかと人に尋ね、三浦半島に行つては、どのあたりなら人魚が出そうですかね? と聞き取り調査から始めた楽しそうに話す長塚さんに感嘆。そして、新たな世界に出会える期待を胸いっぱい、逗子公演に出かけた。

シンプルな舞台、役者さんたちの身体と声で、物語の世界が目の前にどんどん形成されていく。観る者の頭の中は刺激的に掻き回され、しまいには、どの登場人物も滑稽で愛おしくなる。不可解なもの敬遠されがちな昨今、海や山に息づく何者かの気配のあたたかさに包まれもした。舞台っていいなあ、である。短い時間の中にも、それぞれの人にちゃんと“出会った”感覚は、秀逸



撮影=宮川舞子

クリス智子 Chris Tomoko

大学卒業時に、東京のFMラジオ局J-WAVEでナビゲーターデビュー。以来、10年半務めた平日朝のワイド番組「BOOM TOWN」をはじめ、同局の各番組を担当。現在はJ-WAVE「TALK TO NEIGHBORS」レギュラーナビゲーターのほか、MC、ナレーション、トークイベント出演、また、エッセイ執筆、朗読など、幅広く活躍中。

作・演出:長塚圭史
音楽:阿部海太郎
振付:柿崎麻莉子
出演:菅原永二、柿崎麻莉子
四戸由香、長塚圭史、片岡正二郎
演奏:トウヤマタケオ

な短編小説の味わいのもあった。

箱根山神山のへビは、今日も孤独を持って余しながら棲んでいることだろう。ひょっとするとコミュニケーション上手になっているかもしれない。昨日も江ノ島の前を車で通ったが、私の頭の中では、人魚が跳ねたのだった。

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

『スプーンフェイス・スタインバーグ』

2024年2月16日(金) - 3月3日(日)
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

作:リー・ホール
翻訳:常田景子
演出:小山ゆうな
Wキャスト:片桐はいり、安藤玉恵

二人の俳優が挑んだ10歳の少女

文=徳永京子(演劇ジャーナリスト)

『ピリー・エリオット〜リトル・ダンサー〜』などで知られるイギリスの劇作家、リー・ホールが'97年にラジオドラマとして書いた戯曲は、ユニークな方法で世界の美しさを教えてくれた。

主人公のスプーンフェイスはオペラが好きな10歳の女の子。小児がんを患っていて、残されている時間はおそらく長くない。詳しくは語れないが、ある種の発達障害がある。外見は一般的に可愛いとされるタイプではないようだ。つまり子供が主人公と聞いた時に多くの人がイメージする、わかりやすく明るい要素は、物語の入口に用意されていない。

けれど、独自の視点でオペラの良さを語る時、病院の先生や両親との会話を教えてくれる時、また、自身の病気や外見について話す時、そこには揺るぎない愛情と鋭い感性と深い考察があり、語られる対象が素晴らしく魅力的なのだ。どんなものなかにも美しさや優しさがあり、それを見つめるのはちょっとした考え方の工夫だと彼女は教えてくれ、触れるものをどれも輝かせる。

そんなスプーンフェイスの個性を、主にせりふの工夫で表現した安藤玉恵と、動きに託した片桐はいり。その違いは同じ戯曲と思えないほどで、一人芝居を二人の俳優で交互に上演する意味が大いにある企画だった。早々にチケットが完売したので、ぜひ再演の機会をつくってほしい。



撮影=沼忠之

徳永京子 Kyoko Tokunaga

演劇ジャーナリスト。朝日新聞劇評のほか、演劇専門誌、情報誌、公演パンフレット、WEB、新聞等で、インタビュー、作品解説、劇評などを執筆。著書に『我らに光を』(河出書房新社)、共著『演劇最強論』(飛鳥新社)。

KAATキッズ・プログラム2024

『ペック』from スコットランド

2024年7月6日(土) - 7月7日(日)
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

ユーモアな掛け合いに潜む問いかけ

文=大島広子(舞台美術家)

自然豊かな国、スコットランドから来た親子で楽しめるこの舞台作品は、自然とユーモア、そして演劇のマジックに満ちたものだった。劇場に入ると、洗濯干し用の紐2本が舞台の上下に横にピンと張られていて、そこに黄色い洗濯バサミが一つ。シンプルな空間だが、とても視覚的だと感じたのは、豊かな音響効果が、観客の想像力を掻き立てたからだ。男が一人、風の音によって動かされ、鳥の鳴き声に翻弄され、美味しそうにポテトチップスをむしゃむしゃ。音が見えるような感覚で目の前に森がつくられていった。この作品はシアターグリーンブックという、イギリスで生まれた舞台芸術のなかの環境配慮のガイドラインに基づいて上演されている。ものを使わず、想像力と音の力で世界をつくる芸術性は今後さらに注目されるのではないだろうか。

絶え間なく子どもたちの笑い声と鳥の鳴き声が溢れていたのだが、ユーモアに溢れているだけでなく、現代社会を非常にシニカルに描いた作品でもある。自らの居心地の良さのために、あらゆる手段で不必要なものを排除しようと悪戦苦闘する男の姿は、現代社会における人間の営みの



©Mihaela Bodlovic

大島広子 Hiroko Oshima

ロンドン芸術大学卒業後、文化庁新進芸術家海外研修員としてドイツで研鑽を積み、舞台美術家として国内外で活動。2022年~23年に英国ランカスター大学大学院にて持続可能な演劇の研究を行い、2024年に芸術文化の環境負荷軽減を推進するため、一般社団法人「Image Nation Green」を設立。

の限界を風刺しているようだ。視界を遮る木を切り倒す、生き物の生態系を都合により変える、あるいは少数の権力者によって傷つけられる子どもたちのことまでを考えずにはいられない。自分と自分の周りがあるさまざまな存在との関係性を考えさせられ、それを突きつけられる強さを感じた。

KAATキッズ・プログラム2024

『らんぼうものめ』

2024年7月20日(土) - 7月28日(日)
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

子どもとドラマの狭間で揺れる私

文=坂本美雨(ミュージシャン)

本格的に夏が始まった週末、ワクワクしながら横浜に向かった。KAATでの舞台に出演していたこともあり通い慣れた道。海の気配と中華街の熱気の間にあるこの劇場がとても好きだ。

この日は、この夏9歳になった娘と一緒にKAATキッズ・プログラム2024『らんぼうものめ』を観に。幼い頃から劇場には連れて行っていたので、今では長い演目も意外と集中して観ていたりして、うれしくなる。会場はすでに子どもたちでいっぱい。私たちは臨場感を求めて後席へ。後ろには、6歳と3歳頃だろうか、かわいらしい姉妹がお父さんを挟んで座っている。しっかりした様子の眼鏡の姉。妹の方は緊張してお父さんの腕を握っている。客電が落ち一気に空間が怪しげな雰囲気になり、飲み込まれると、後ろから「いやー! こわいー!」と叫び声が。振り向くと、妹が出口へ走りだしていた。慌てて後を追うお父さん。ポツンと残された姉は、「つたく、どこ行ってんのよ」と一言。舞台では、少年の妖しい世界への冒険が始まっていく。そして舞台が展開するたびに耳に入ってくる後ろの姉の鋭いツッコミが可笑しくてたまらない。最後まで私たちは姉のツッコミを聞き続け、舞台と後ろの席のドラマの狭間で揺れていたのです。



撮影=宮川舞子

坂本美雨 Miu Sakamoto

1980年、音楽一家に生まれ、東京とNYで育つ。1997年、「Ryuichi Sakamoto feat. Sister M」名義で歌手デビュー。音楽活動に加え、ラジオテレビ司会、ナレーション、執筆、演劇など表現の幅を広げている。

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース 『ライカムで待っとく』

2024年5月24日(金) - 6月2日(日)
KAAT神奈川芸術劇場 <中スタジオ>

作:兼島拓也
演出:田中麻衣子
出演:中山祐一朗、前田一世
佐久本宝、蔵下穂波
小川ゲン、神田青
魏涼子、あめくみちこ

ただ沖縄だけの問題ではなく

文=延江浩(ラジオプロデューサー)

「ライカム」という名前を知ったのは、沖縄本土復帰50年特番取材でのことだった。「沖縄は娯楽施設が少ないからね。休みにはみんな集まってくるんですよ」と中城村出身のシンガー・ソングライター 普天間かおりさんが教えてくれた。本島中部に存在した琉球米軍司令部(Ryukyu Command headquarters)の略称「ライカム」は地名として残り、米軍専用のゴルフ場だった場所に「イオンモール沖縄ライカム」がオープン、家族連れで賑わっている。中頭郡北中城村字ライカム1番地がその住所。カタカナ表記の地名「ライカム」がいかに沖縄らしい。

東京に戻り、しばらくして長年の友人、劇作家の長塚圭史に誘われたのが『ライカムで待っとく』という芝居。沖縄在住の兼島拓也作だという。

初演は沖縄本土復帰 50 年の2022年、第30回読売演劇大賞優秀作品賞を受賞するなど、大きな話題になった本作が今年念願の再演となった。

再度劇場に足を運び、これは沖縄だけの問題ではないと気づいた。

広大な米軍基地跡が返還されれば市民の憩いの場として利用されるのは沖縄に限らない。東京なら代々木公園には米軍人・軍属の集合住宅ワシントンハイツがあったし、米軍の専用宿舎「グリーンパーク」は郊外の武蔵野中央公園、立川飛行場跡地が昭和記念公園にといった具合に姿を変え、今もそこにある。

ただ、その土地の過去の顔を知っているのはどれだけの人のだろう。時間の経過とともに記憶は風化し、土地の記憶は消えゆくのみだ。世界を俯瞰すると、戦禍はとどまることはない。

「50年という単位で区切って終わりにするのではなく、常に問い続けていくべきだ」

兼島拓也のそんな言葉が深く心に残る演目だった。



撮影=引地信彦

延江浩 Hiroshi Nobue
1958年生まれ。TOKYO FM「村上RADIO」ゼネラルプロデューサー。『アタシはジュース』で小説現代新人賞を受賞し、作家デビュー。手がけたラジオ番組がアジア太平洋放送連合賞ドキュメンタリー部門グランプリ、ギャラクシー大賞など受賞。

ただいま、 KAAT準備中 KAAT2024年 メインシーズン「某」開幕!

KAATでは、2021年よりシーズン制を導入し、9月から翌年3月までの期間を「メインシーズン」とし、長塚芸術監督が掲げたコンセプトに沿った演目を上演しています。今年度のテーマは「某」。そのシーズン開始に先立ち、8月に劇場の外壁の張替えが行われました。今年度はイラストレーターの竹浪音羽さんの作品を基調としています。お近くにいらした際は、ぜひお立ち寄りください。

また、メインシーズンを<1期>から<3期>に分け、各期の公演をセットで、お得に購入できるシーズンチケットを、今年度もご用意しております。各公演の先行発売に先駆けて、どこよりも早く、神奈川県民割引よりお得な特別料金でチケットをご購入いただけるチャンスです。複数期での購入による特典もご用意しております。詳細は、KAATのウェブサイトをご覧ください。



神奈川へ、会いに

第9回

特定非営利活動法人
黄金町エリアマネジメントセンター

長塚芸術監督が、今、気になっている街の人にふらっと会いに出かけます。第9回は、横浜トリエンナーレと同時開催の「黄金町バザール 2024」でも多くの方が訪れ、アートの街となった黄金町の再生に尽力した特定非営利活動法人「黄金町エリアマネジメントセンター」の事務局長・山野真悟さんを訪ねました。



環境浄化推進協議会の事務局も担当し、その頃からアートだけでなく、まちづくりの比重も大きくなっていきました。

長塚 先ほど山野さんと一緒に周辺を回り、多くのアーティストに会いました。今はどのくらいのアーティストが滞在しているのですか。

山野 形態はさまざまですが、国内外から約50組のアーティストが暮らしています。

長塚 かなり大規模ですね。この街にアートが根づいたという感覚はありますか。

山野 海外からは、日本のAIRといえば黄金町だというイメージがあるそうです。AIRを企画している海外の団体も、よく黄金町に視察にいらっしゃいます。

長塚 横浜トリエンナーレ期間中に黄金町バザールを訪れた時、想像以上に街と展示が絡み合っていて、路地を曲がるとアート空間が広がったり、得体の知れない不思議な感覚になりました。アーティストにとって、ここに滞在する魅力は何だと思いますか。

山野 一つは、同業者が身近にいて、お互い影響、サポートし合える環境があることだと思います。隣で見ているのも楽しそうですよ。アーティストが集まって、カラオケに行ったりもしているそうです。

長塚 多国籍なアーティストたちのカラオケは面白そうですね。

山野 アーティストにとっていい環境を整備できたという自負がある一方で、我々は今、大きな問題も抱えているんです……。



山野さんが今、
頭を悩ませる
問題は？
続きはKAAT
ウェブサイトにて。



写真=石渡朋

主催公演

＜メインシーズン「某」プログラム＞



KAAT神奈川芸術劇場プロデュース
『リア王の悲劇』
9月16日(月・祝)ー10月3日(木) **ホール内特設会場**

作:W.シェイクスピア
翻訳:河合祥一郎(『新訳 リア王の悲劇』(角川文庫)) 演出:藤田俊太郎
出演:木場勝己
水夏希、森尾舞、土井ケイト、石母田史朗、章平、原田真樹
新川将人、二反田雅澄、塚本幸男
伊原剛志 ほか

チケット発売中

今もなお上演され続けるシェイクスピア作品。
現代に通じる普遍的テーマを、実力あふれる俳優陣・スタッフで上演!

KAAT×山田うん×池上高志
『まだここ通ってない』
10月18日(金)ー10月20日(日) **ホール内特設会場**

構成・演出:山田うん、池上高志
出演:Co.山田うん
チケット発売中

からだサイエンスの豊かな共生と発見のためのエンターテインメント開幕!

（チケット取扱いお問い合わせ）チケットかながわ 0570015415（10時〜18時／年末年始を除く）

日英国際共同制作 KAAT×Vanishing Point
『品川猿の告白
Confessions of a Shinagawa Monkey』
11月28日(木)ー12月8日(日) **大スタジオ**

原作:村上春樹(短編『品川猿』『品川猿の告白』より)
原案・構成・演出:マシュー・レントン
出演:那須凜、サンディ・グライアソン、伊達暁、エリシア・ダリ
田中佑弥、サム・ストップフォード、家納ジュンコ
アイシャ・グッドマン、エイリー・コーエン(人形遣い)

チケット発売中

「カイハツ」プロジェクトを経てKAATと劇団ヴァニシング・ポイントが、日英国際共同制作で贈る、村上春樹原作の叶わぬ恋の物語。

KAAT×ケダゴロ×韓国国立現代舞踊団
『黙れ、子宮』
12月13日(金)ー12月15日(日) **大スタジオ**

振付・演出・構成:下島礼紗
出演:Lee Kyunggu, Lee Daeho, Im Sojeong
下島礼紗
木頃あかね、小泉紗織、中澤亜紀(ケダゴロ)
大貫桃加、小野寺夏音、小島優花、鈴木菜々、麗羅 ほか

9/28(土)一般発売
9/21(土)KAme(かながわメンバーズ)先行発売

気鋭のダンスカンパニー・ケダゴロを率いる下島礼紗による、子宮とキンタマを巡る壮大なダンス作品!

提携公演 ●横浜夢座25周年記念公演『富貴楼お倉 -横濱から日本を動かした女-』 ●lal banshees『幽霊』another ver.

KAATな人の行きつけ
《第8回》
オステリア ポZZI

KAATの周辺は、食事や買い物、観光スポットが豊富な魅力的なエリア。そこで出演者やアーティスト、スタッフが足しげく通う、この街の「行きつけ」をご紹介します。

「Osteria POZZI」は、山下町で20年以上の歴史をもつイタリアンレストラン。ランチときには、この街に住む人や周辺にお勤めのビジネスパーソンでごった返す大人気のお店です。KAATスタッフも足しげく通うこのお店で一番人気のメニューは、小海老のトマトクリームのパスタ。もっちりとしたアルデンテに茹で上げられたスパゲッティとぷりぷりの小海老を、まろやかなトマトクリームソースが包み込みます。ランチのAセットには、ニンニクの香ばしさが食欲をそそるガーリックトーストつき。ディナーは、カプレーゼやカルパッチョなどの一品料理や、ピッツァやスパゲッティ、フェットチーネなどのフードのほか、ビール、ワイン、カクテルなどドリンクも種類豊富に揃っています。KAATでの観劇の前後に、お腹を空かせて駆け込みたいお店です。

Osteria POZZI(オステリア ポZZI)
〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町25-14 モナニビル 2F
☎045-651-5266
〈営業時間〉11:30~14:00、18:00~21:00(L.O.)
〈定休日〉日曜 ※ランチは予約不可 ※現金のみ

写真:石渡朋

「小海老のトマトクリーム」ランチ単品 ¥900(税込)

KAAT 公演スケジュール 2024 AUTUMN

8月31日(土)ー9月8日(日)	オーストラ・マコンドー『他と信頼と』	大スタジオ
9月13日(金)ー9月16日(月・祝)	横浜夢座25周年記念公演『富貴楼お倉 -横濱から日本を動かした女-』	大スタジオ
9月16日(月・祝)ー10月3日(木)	KAAT神奈川芸術劇場プロデュース『リア王の悲劇』	ホール内特設会場
9月18日(水)ー9月29日(日)	シアター・コントロニカ コント公演『並行食堂』	大スタジオ
9月23日(月・休)ー10月20日(日)	KAAT EXHIBITION 2024「南条嘉毅展」地中の渦	中スタジオ
10月6日(日)	JDSF BREAKING 関東甲信越ブロック選手権2024	大スタジオ
10月11日(金)ー10月14日(月・祝)	lal banshees『幽霊』another ver.	大スタジオ
10月18日(金)ー10月20日(日)	KAAT×山田うん×池上高志『まだここ通ってない』	ホール内特設会場
10月19日(土)	DANCE TOP TIERS Vol.1	大スタジオ
10月26日(土)ー10月27日(日)	KYOKO KOIZUMI TOUR 2024『BALLAD CLASSICS』	ホール
11月1日(金)ー11月3日(日・祝)	『内村文化祭'24 還暦』	ホール
11月9日(土)	みきくらのかい	ホール
11月16日(土)ー11月17日(日)	THE MONKEY KING『孫悟空』Episode ZERO	ホール
11月23日(土・祝)ー11月24日(日)	鬼頭明里 5th Anniversary LIVE『All Light!』	ホール
11月28日(木)ー12月8日(日)	日英国際共同制作 KAAT×Vanishing Point『品川猿の告白 Confessions of a Shinagawa Monkey』	大スタジオ
11月29日(金)ー12月1日(日)	月城かなと 1st Concert『de ja Vu』	ホール
12月上旬ー中旬	横浜国際舞台芸術ミーティング2024(YPAM2024)	ホールほか
12月13日(金)ー12月15日(日)	KAAT×ケダゴロ×韓国国立現代舞踊団『黙れ、子宮』	大スタジオ
12月21日(土)ー12月22日(日)	ラオス×日本 ろう者と聴者が協同する『アジアのオブジェクトシアター』	中スタジオ
12月21日(土)ー12月22日(日)	KAAT マルシェ	アトリウム
12月21日(土)ー12月29日(日)	SPECIAL ENTERTAINMENT STAGE『RUNWAY』	ホール
毎月開催(日程は決定次第発表します)	KAATフレンドシッププログラム「みんなのKAAT バックステージツアー」	ホール

※情報は2024年9月1日現在のものです。変更となる場合がございます。予めご了承ください。詳細は、各公演のウェブサイトをご確認ください。

今号の表紙について

KAAT PAPER秋号の特集テーマは「劇場とコミュニティ」。劇場はコミュニティの一つになりうるのではないかと、という長塚芸術監督の思いから生まれた一冊です。

今回は「コミュニティ・集団」などをキーワードに、画家の相川恵子さんに作画を担当いただきました。複数の顔が重なり、一人の顔を成している様子を描いています。



相川恵子 Keiko Aikawa
1989年新潟県生まれ。長岡造形大学視覚デザイン学科ビジュアルアートコース卒業。新潟を拠点に作家活動を開始。見えている面だけでなく、多面的であり本当は見えない部分があり複雑であることを絵画で表現している。

KAAT 神奈川芸術劇場

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281
TEL.045-633-6500(代表) FAX.045-681-1691
https://www.kaat.jp

- みなとみらい線:渋谷駅から東横線直通で35分!横浜駅から6分!
日本大通り駅から徒歩約5分。元町・中華街駅から徒歩約8分。
 - JR根岸線:関内駅または石川町駅から徒歩14分。
 - 市営地下鉄:関内駅から徒歩14分。
 - 市営バス:芸術劇場・NHK前すぐ。
横浜駅前東口バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約25分)
桜木町駅前バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約10分)
※上記のりばから発車するバスはすべて「芸術劇場・NHK前」を通ります。
 - 神奈川芸術劇場有料駐車場(65台)もご利用ください。
- 指定管理者:(公財)神奈川芸術文化財団



KAAT PAPER 読者アンケート

今後の誌面づくりに活かすため、皆さまのご意見・ご感想をぜひお寄せください。アンケートにご回答いただいた方の中から抽選で1組2名様に、『品川猿の告白 Confessions of a Shinagawa Monkey』(原作:村上春樹、原案・構成・演出:マシュー・レントン)のご招待日:2024年11月28日(木)18:30開演のプレビュー公演のチケットをプレゼントいたします。※プレゼント応募期限:2024年10月31日(木) ※厳正なる抽選のうえ、当選者の発表はメールにてご連絡をもって代えさせていただきます。



季刊誌 神奈川芸術劇場 KAAT PAPER 秋号(年3回発行) 2024年9月15日発行 発行=KAAT神奈川芸術劇場 編集=伊藤総研株式会社、松田美保 編集協力=株式会社ボイス クリエイティブデザイン・高田唯(Airight) フォトデザイン・高田唯(Airight) デザイン・コーポレートデザイン=高田唯(Airight) イラストレーション=ひだかもと 表紙ビジュアル=相川恵子